

正法眼藏隨聞記

水野弥穗子訳



筑摩叢書 5

筑摩叢書 5

正法眼藏隨聞記

水野弥穗子 訳



筑摩書房

水野弥穂子（みずの やおこ）

1921 年東京に生まれる
東北大学文学部卒 国語学専攻
東京女子大学教授

正法眼蔵随聞記

筑摩叢書 5

昭和 38 年 5 月 30 日 第 1 刷発行

昭和 63 年 5 月 30 日 第 34 刷発行

訳 者 水 野 弥 穂 子

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2 の 8

電話 東京 (291) 7651 番 (営業)

(294) 6711 番 (編集)

郵便番号 101-91

振替東京 6-4123 番

© 1963

Printed in Japan

精興社印刷・永興舎

ISBN4-480-01005-X C 1015

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

正法眼藏隨聞記	一
正法眼藏隨聞記	二
正法眼藏隨聞記	三
正法眼藏隨聞記	四
正法眼藏隨聞記	五
正法眼藏隨聞記	六

解題

道元・その人と思想

正法眼藏隨聞記内容細目

水野弥穗子	二五
増谷文雄	二七
	二五

正法眼藏隨聞記

凡 例

この書は、現在までに知られる最善の本である長円寺本正法眼藏隨聞記を底本として、なるべく現代人に読みやすい形に整えようとしたものである。

章段の区切りは、原本では朱で○印をつけ、行を改めてある。この書の章段は、原本のこの区切りに従った。段の区切りの中でさらに細分した場合は一の(一)、一の(二)のようにその旨を示した。

章段の題は、本文のはじめの言葉をもとにして、新たに加えた。

原文は、片かな漢字まじりで書かれ、所々に和化漢文の部分を交える。その片かなは平がなに直し、和化漢文の部分は読み下した。和化漢文の読み下し文において、校訂者が付け加えたかなは、片かなとした。助詞、助動詞や、送りがなを補った場合も同様である。右以外に補入した場合は()の中に入れて示した。

ふりがなは、校訂者においてつけた。ただし、原文にあるふりがなは()の中に入れて示した。

漢字の音読には、唐音の用いられることが少なくなかったと思われるが、今は、現代版であることを考慮に入れて、二、三の特殊な単語についてのみ、唐音を用い、一般には呉音によった。

原文で「心」「力」のように、名詞の下に一字送ってあるものは「心」^{こころ}「力」^{ちから}の形にした。「自」^{みづか}「徒」^{いた}は「自ら」^{みづかみづか}「徒ら」^{いたいた}とした。

原文のかなに漢字をあてたものは、漢字を()の中に入れ、原文のかなはふりがなの形にした。

漢字の字体は、現行普通の字体に統一した。

かなづかいは、歴史的かなづかいに統一し、一々その誤りをあげることはしなかった。

次の文字は統一して平がなに改めた。

非ズ——あらず　メ——して　如シ——ごとし　也——なり　亦・又——また　只——ただ　猶——なほ　須——すべからく

其——そノ(原文「其ノ」は「その」)　此——こノ(原文「此ノ」は「この」)

或——ある　或ハ——あるイハ　程——ほど　為——ため　様——やう　莫レ・無レ——なかれ

句読点、引用符をつけ、行を改めることは、校訂者において行なった。

校訂は、底本の本文を改めた箇所を示す。慶安本、流布本との相違を一々あげることとはしなかった。

注は、本文の読み方の典拠、その語の用例、参考事項等にわたり、特に、この書の性質上、道元禪師の他の述作中の言葉との関係になるべくあげるように努めた。引用の漢文は、読み下し文に改めた。

正法眼藏隨聞記 一

一 はづべくんば明眼の人をはづべし

示に云く、はづべくんば明眼の人をはづべし。

予、在宋の時、天童淨和尚、侍者に請するに云く、
「外国人たりといへども元子器量人なり。」と云ツてこ
れを請す。

予、堅く是レを辭す。

その故は、「和国にきこえんためも、学道の稽古の
ためも大切なれども、衆中に具眼の人ありて、外国人
として大叢林の侍者たらんこと、国に人なきがごとし
と難する事あらん、尤もはづべし。」といひて、書状
をもてこの旨を伸べしかば、淨和尚、国を重くし、人
をはづることを許して、更に請ぜざりしなり。

注

一 「はづ」とは元來、相手に対して自分の劣っている点

道元禪師が教えて言われた。

人の批判を氣にするなら、物の道理の見通せる人からの批判を氣
にすべきである。

わたしが宋にいた時、天童山の如淨禪師が、わたしに侍者になる
ようにと頼んで言われるには、「外国人（日本人）ではあるが、道
元君は徳もあり、力もある人物だ。」と言って、侍者になるように
と頼まれた。

しかし、わたしは堅く辞退した。

その理由は、「侍者にしていただくことは、わが日本に評判が伝
わるためにも、仏道を学ぶ修練のためにも、わたくしにとって非常
に重要なことでございます。しかし、同じ天童山の修行者の中に、
道理のわかった人がいて、『外国人でありながら、天童山ともある
う大道場で侍者になるとは、大宋国に人物がないように見える。』
と非難をするかもしれません。そうした批判は、特に心して反省し
なければなりません。」と言って、手紙に書いて、この趣旨を申し

を自覺し、引け目を感じる意。「ヒトヲ ハツ」(日葡辭書)。

二 物の道理のよく見通せる人。

三 道元禪師は貞応二年(三三三)入宋、宋の宝慶元年(三三三)から同三年(日本、安貞元年、三三七)まで天童山で如浄禪師の教えを受け、その法を嗣いだ。

四 天童如浄(二套一三三)。南宋明州の人。長身であつたので、世の人が長翁と呼んだ。雪竇智鑑の法を嗣いだ。

五 住持・長老のそばにいて、公私にわたり日常の仕事の代行補佐をする役。ここは特に堂頭侍者であらう。「如し侍者を請ぜば、すべからく色力少壯にして辞令分明に、梵行清修し、心機転旋なるべし。自然に堂頭(住持人)の諸事一切現成す。」(禪苑清規、堂頭侍者章)。

六 元は道元の上略。上字を欠くのが礼。子は名にそえて親しみを表わす。

七 仏道をまなぶこと。稽古は修練。

八 叢林は、衆僧が和合して仏道を修行する道場。大樹が叢りはえてよく調和している様子にたとえる。

二 我れ病者なり、非器なり

示に云ク、有ル人の云ク、「我レ病者なり、非器なり、學道にたへず。法門の最要をききて、独住隠居して、性をやしなひ、病をたすけて、一生を終へん。」と云フに、

のべたところ、如浄禪師も、大国の体面を重んじ、また、立派な人からの批判に心を用いるわたしの氣持を了解して、二度と頼もうとはなさらなかった。

教えて言われた。

ある人が、「わたしは病身ではあり、力量もない者で、仏道を学ぶには耐えられません。そこで、仏様の教えの、いちばん大切なところを承って、家族から離れてひとり住み、世間に交わらず隠居し

示ニ云ク、先聖^{四尊んしやう}必ズしも金骨にあらず、古人^{あに}豈^な皆上器^きならんや。滅後^六を思へば幾ばくならず、在世^{せい}を考ふるに人皆^{みな}俊なるにあらず。善人もあり、惡人もあり。比丘衆^{ちくしゆ}の中に不可思議^{ふかぎ}の惡行するもあり、最下品^{さいげほん}の器量もあり。然れども、卑下^{ひげ}して道心^{だうしん}をおこさず、非器なりといつて学道せざるなし。

今生^{こんじやう}もし学道修行せずは、何れ^{なん}の生^{なま}にか器量の物となり、不病の者とならん。ただ身命^{しんみやう}をかへりみず発心修行する、学道の最要なり。

注

- 一 それをなすだけの力量のないこと。
- 二 仏の教え。
- 三 いのち。生命。
- 四 過去に悟りを開いた人々。祖師たち。
- 五 すぐれた生まれつき。
- 六 釈迦牟尼仏が入滅されてからの年代。大きい目で見れば、千年、二千年はそれほどの長時間でない。道元禪師の末世思想への態度。
- 七 出家した男子。僧。Bhikṣu の音訳語。
- 八 思いもよらない悪い行ない。
- 九 品は等級、階級。最下級。
- 一〇 仏の正覚を求める心。この心をおこすのが発心また発

て、いのちをだいにして、病氣養生しながら、一生を終えようと思ひます。」と言つたのに対して、道元禪師が教えて言われた。

むかし修行をして悟りを開かれた祖師たちは、必ずしも筋金入りの強いからだではなかった。また、いにしへの仏道を学んだ人がみな、特にすぐれた素質があつたのでもない。釈迦牟尼仏入滅の後、年代が隔たるにつれて人間の器根が次第に低下し、修行も悟りもなくなるということであるが、今はまだそれほど衰えた世の中でもない。また逆に、仏在世の當時を考えてみるに、皆が皆すぐれた人たちばかりでもなかった。善人もあれば惡人もあつた。出家の弟子たちの中にも、思いもかけない悪い行ないをする者もあつた。最もそまつな生まれつきの者もあつた。それでも、自分から卑下して道心をおこさなかつたり、また、それだけの力がないと言つて仏道を學ばなかつた人はない。

今この一生のうちに仏道を學び、修行しなければ、この次、いつの世に生まれかわつて力量のある人となり、病氣をしない人になるというのか。ただ自分のからだのことも命のことも考えず、菩提心をおこして修行するのが、仏道を學ぶ上でいちばん大切なことである。

菩提心である。

三 学道の人、衣食を食ふことなかれ

示に云ク、学道の人、衣食を食ふことなかれ。人々皆食分あり、命分あり。非分の食命を求むとも来るべからず。況ンや学仏道の人には、施主の供養あり、常の乞食に比すべからず。常住物これあり、私の営ミにもあらず。菓蔬・乞食・信心施の三種の食、皆是れ清浄食なり。その余の田商仕工の四種は、皆不浄邪命の食なり。出家人の食分にあらず。

昔一人の僧ありき。死して冥界に行きしに、閻王の云ク、「この人、命分未ダ尽キズ。帰すべし。」と云ヒしに、有る冥官の云ク、「命分ありといへども、食分既に尽キぬ。」

王の云ク、「荷葉を食せしむべし。」と。然シより蘇りて後は、人中の食物食することをえず、ただ荷葉を食して残命をたもつ。

然れば出家人は、学仏の力によりて食分も尽くべからず。白毫の一相、二十年の遺恩、歴劫に受用すとも尽くべきにあらず。行道を専ラにして、衣食を求むべきにあらずるなり。

教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、衣食をむさぼってはならない。人はめいめい一生にそなわった食べ料があり、寿命がある。分をこえた食や寿命を求めても得られるものではない。まして仏道を学ぶ人には施主の供養がある。それは仏道を行ずる人へのみそなわった徳で、世間普通の乞食とは比べべくもないものである。また修行の道場には共有の財産もあって、それは個人の営みによるものではない。木の実・草の実と、乞食と、信者の布施という三種の食は、みな清浄の食である。その他の農耕・商売・宮づかえ・手しごとなどの四種のなりわいによる食は、みな不浄な、仏の教えにそむいた食で、出家人の受けるべき食ではない。

昔、一人の僧があった。死んで冥土へ行ったところ、閻魔大王が、「この人はまだ寿命が尽きていない。娑婆へ帰せ。」と言った。ところが、閻魔の庁の役人のひとりが答えて、「命分はまだありますが、食分の方がすでに尽きております。」と言う。

大王は、「食分が尽きたのなら蓮の葉を食べさせよ。」と言った。そのようなわけで、この僧が生きかえて後は、人間の食べ物を食ふことができず、ただ蓮の葉ばかり食べて残りの命を保った。これでわかるように、出家人というものは、仏道を学ぶ功德によ

身軀血肉だにもよくもてば、心も随したがつて好くになると、
 三 医法等に見る事多し。況ンや学道の人、持戒三梵行三にして
 一四 仏祖の行履にまかせて、身儀ををさむれば、心地も
 一五 随へつて整ととのなり。

学道の人、言ことばを出いさんとせん時は、三度顧かみて、自
 利、利他のために利あるべければ是レを言ふべし。利
 な（か）らん時は止とどべし。

是ノごとキ、一度にはしがたし。心に懸かけて漸い々に
 習フべきなり。

注

一 寺に所属して、その寺全体の財産である田園雑具など
 二 菓は木の実、蔬は草の実、乞食は托鉢によって食物を
 得ること。信心施は信者がくれる布施。

三 上の三種の食べ物、清浄とは、人の執着の対象となら
 ないこと。

四 四民。ここはその仕事。仕は当時は「さぶらいつかえ
 る者」であったから、この字でもよい。

五 比丘が乞食によらず、田畑をたがやしたり、学問知識
 を売ったり、権門の庇護を受けたり、占いなどをして生
 活の資を求めること。清浄食の対。

六 目に見えない世界。地獄。めいど。

七 地獄の閻魔の序の役人。

って、命はもとより、食べ料も尽きることはない。これは經文に説
 かれてゐる通り、釈尊三十二相のうちの白毫相びやくごうさうのおかげや、釈尊が
 自ら百年ある寿命を二十年縮めて、後の代の仏弟子のためにのこさ
 れた恩によるので、それはどんなに長い間いただいて用いても尽き
 ることがない。だから出家人たるものは、仏道修行を専一にして、
 そのほかに衣食を求めてはならない。

医学の書などに、身体骨肉さえ健康に保てば、それにつれて心も
 よくなると書いてあるのを、よく見かける。まして仏道を学ぶ人は、
 戒をたもつて清らかな行ないをし、仏祖の日常の行ないの通りに、
 その身をふるまえば、心もそれにつれてととのうのである。

仏道を学ぶ人が、物を言おうとする時は、言う前に三度反省して、
 自分のためにも相手のためにもなるようならば、言うがよい。利益
 のなさそうな時には言うのをやめるべきである。

こういうことは、一ぺんにはできないものである。心にかけてだ
 んだんに習熟すべきである。

八 人間界。「ニンデウ、ヒトノ ナカ」(日葡辞書)。

九 「ジキモツ、クイミノ」(日葡辞書)。

一〇 仏藏經、了戒品第九に、「仏弟子は衣食所須を思いわずらうな。如来は滅後、白毫相中百千億分のうちの一分を舍利および諸弟子に供養する。たとい、一切世間の人が皆同時に出家しても、白毫相の百千億分の一も、尽きることがない」とある。白毫は仏の三十二相の一。仏の眉間にある一本の長い毛。ふだんは右に巻いておさまり宝石のように見える。

二 釈尊は百年の寿命のうち二十年を縮めて、末世の仏弟子に施されるという。禪苑清規には「世尊二千年の遺蔭、児孫を蓋覆す。白毫光一分の功德、受用不尽。」とある。

三 医学の書。医方の音写か。

四 戒にしたがった清浄の行。

五 日常の一切の行ない。

六 心のこと。心は一切を生ずるから地という。

一六 「ゼンゼン、シダイシダイニ」(日葡辞書)。

校訂

1 原文莫貳⁺。漢字により、かなを改めた。

2 原文「豪」。

3 原文「遺思」。慶安本・流布本「遺因」。典座教訓は「世尊二千年の遺恩」。禪苑清規は「世尊二千年の遺蔭」。

四 学道の人、衣食に勞することなか

れ

雜話の次、示に云ク、学道の人、衣食に勞することなかれ。この国は辺地小国なりといへども、昔も今も顯密二道に名を得、後代にも人に知られたる人、いまだ一人も衣食に饒なりと云フ事を聞かず。皆貧を忍び他事をわすれて一向その道を好む時、その名をも得ルなり。況んや学道の人、世度を捨ててわしらず。何としてか饒なるべき。

大宋国の叢林には、末代なりといへども、学道の人千万人の中に、あるイは遠方より来り、あるイは郷土より出で来るも、多分皆貧なり。しかれども愁とせず、ただ悟道の未だしき事を愁て、あるイは楼上若シクは閣下に、考妣を喪せるがごとくにして道を思ふなり。親り見しは、西川の僧、遠方より来りし故に所持物なし。纔に墨二、三箇の直、兩三百、この国の兩三十にあたれるをもて、唐土の紙の下品なるは、きはめて弱きを買ヒ取り、あるイは襖あるイは袴に作ツて着れば、起居に壞るるへ音してあさましきをも顧りみず愁ず。人、「自ら郷里にかへりて道具装束せよ。」と言フを聞いて、「郷里遠方なり。路次の間に光陰を虚シ

いろいろの話をされたとき、教えて言われた。

仏道を学ぶ人は、衣食を思い煩ってはならない。わが国は仏出世のインドから遠く離れた小国ではあるが、昔も今も、顯教・密教において名声を得、後の代まで人々に知られた人で、衣食にゆたかであったということは、一人として聞いたことがない。みな貧乏に耐え、ほかの事は全く念頭におかず、ひたすらその専門の道をすてずに学ぶ時、その名声も得るのである。まして、仏道を学ぶ人は、世渡りのわざを捨て、世渡りのために東奔西走しないものである。物にゆたかであらうはずがない。

大宋国の修行の道場では、世は末代であるとはいえ、仏道を学ぶ人は千万人もある。その中には、あるイは遠方から来、あるイは生まれ故郷を離れてくる者もあるが、多くはみな貧乏である。それでも、貧乏など苦にせず、ただ仏道の悟りの及ばないことを苦にして、あるイは高殿の上、あるイは高殿の下に、所を見つけては坐禪に励み、あたかも亡父母の喪に服しているような気持で仏道を心にかけるのである。

自分が親しく見てきたことでは、こういう話がある。四川省出身の僧であったが、遠方からなので、何も持っていなかった。わずかに墨二、三箇、金額にして二、三百文、わが国の二、三十文にあた

くして学道の時を失はん事」を愁て、更に寒を愁ずして学道せしなり。然れば大国にはよき人も出来るなり。伝へ聞く、雪峰山開山の時は、寺貧にしてあるイは絶烟あるイは緑豆飯をむして食して日を送つて学道せしかども、一千五百人の僧、常に絶えざりけり。昔の人もかくのごとし。今もまた此ノごとくなるべし。僧の損ずる事は多く富家よりおこれり。如来在世に調達が嫉妬を起しし事も、日々五百車の供養より起れり。ただ自を損ずる事のみにあらず、また他をしても悪を作さしめし因縁なり。真の学道の人、なにとしてか富家なるべき。直饒淨信の供養も、多くつもらば恩の思を作して報を思ふべし。

この国の人は、また我がために利を思ひて施を至す。笑つて向へる者に能くあたる、定まれる道理なり。他の心に随はんとせば、是レ学道の礙なるべし。ただ飢を忍び寒を忍びて、一向に学道すべきなり。

注

一 インドあるいは中国から遠く離れた地。

二 真言宗を密教というに対して天台宗その他、經文の教えによる宗派を顯教という。当時の仏教は禪、顯、密の三種に分類されたと言つてもよい。

るものを持っていたが、それで、かの地の紙の下級品はきわめて弱いものであるが、そういう紙を買い求め、あるいは上着に、あるいは袴に作つて着るので、立ち居に破れる音がして人が驚くような姿もかまわず、苦にもしなかった。はたの人が、「自分で郷里に帰つて、道具や身なりをととのえてきたらいい。」と言ふのを聞いて、「わたしの郷里は遠方である。旅の途中でむなしく時を過ごして仏道を学ぶ時を失うのがつらい。」と言つて承知せず、いっこう寒さを苦にもせず、仏道を学んでいた。これだから、大国には立派な人も出てくるのである。

伝へ聞くところによると、雪峰義存禪師がはじめて雪峰山を開かれた時は、寺が貧しくて、あるいはかまどの煙も絶え、あるいは緑豆飯を蒸して食べては日を送つて仏道を学んだが、一千五百人の僧は常に減ることがなかった。昔の人の修行ぶりはこの通りである。今もこの通りでなければならぬ。

僧の墮落はたいへい富裕な家からおこっている。如来在世の時代に、提婆達多が釈尊をねたむ心をおこしたのも、阿闍世王から日々五百車の供養を受けるようになったことがもとである。富はただ自分一人を誤つたばかりでなく、他人にも悪をなさしめた因縁を物語る話である。真実の仏道を学ぶ人は、どうして富家であつてよいだろうか。たとえ清浄な信仰にとづく供養でも、多く重なら、恩を思つてそれに対して報いをする氣持になるにちがいない。

それにわが国の人は、自分のための利益を考えて僧に供養する。また、笑つて自分に向かう者にはおのずからあたりもよくなる。こ

三 世わたり。世途の音写か。

四 走らず。

五 原文上欄に「親」ノ「忌」ヲツトムルヲ「娑娑」に「喪」スト云。」とある。考はなくなった父、妣はなくなった母。

六 四川省。蜀の地方をいう。

七 二、三百。銭の最低の単位「文」であろう。次の「兩三十」は二、三十。

八 宋代であるが、中国の地を一般的にこう言った。

九 袍が絹で作った上のきぬであるのに対して、裏のついた、木綿の上着。

一〇 腰から下に着るもの。

一一 日月。

一二 雪峰義存（公三一九）。徳山宣鑑に嗣ぐ。雲門文偃の師。

一三 食糧がなくて飯をたたくことができないこと。

一四 緑豆は八重なり豆。小豆の一種。インド原産。高さ約四十センチ。和名ブンドウ、アサメ、アオアズキ。典座教訓に「先づ米裏に虫有らんを扱べ、緑豆・糠麩・砂石等、精誠に扱び了れ」とあるから、普通ならえらび捨てるべき雑穀を食べたことになる。

一五 富裕な家。

一六 Devadatta 音訳は提婆達多。調達はその訳名。解脫王の子、ブッダのいとこ。神通力を学び、三十相を備えたが、三逆罪（和合僧を破り、阿羅漢を殺し、仏身より血をい出す）を犯して、生きながら無間地獄に墮ちたと

れは人情の自然である。しかし、相手の心に追従しようとするとき、きつと学道の障りとなる。ただただ飢えを忍び、寒さに耐えて、ひたすら仏道を学ぶべきである。

いう仏教における代表的悪人。

二七 ひとの善事をにくらしく思うこと。提婆は、阿闍世を
まどわして大檀越とし、莫大な供養を得るに至ったので
悪心を起こし、釈尊に對抗して釈尊の僧団を破り、釈尊
を山くずれにより殺そうとし、大阿羅漢の蓮華色比丘尼
をなぐり殺すという三逆罪を犯すに至る。増一阿含四十
六、大智度論卷十四に見える。なお、知事清規に「調達
が五百の衆を誘ふも果して逆となる」とある。

二八 大智度論には「五百釜の糞飯を送る」とある。

校訂

- 1 原文、頭蜜。
- 2 原文、娑毗。

五 古人云く、聞くべし見るべし

一日示ニ云ク、古人云ク、「聞くべし、見るべし。」
ト。また云ク、「経ずんば見るべし、見ずんば
きくべし。」ト。

言は、きかんよりは見るべし。見んよりは経
べし。いまだ経ずんば見るべし。いまだみずんば
聞くべしとなり。

また云ク、学道の用心、本執を放下すべし。身の威
儀を改むれば、心も随ツて転ずるなり。先ヅ律儀の戒

ある日、教えて言われた。

古人は、「耳で聞きなさい、目で見なさい。」と言っている。また、
「実際に経験していないなら目で見なさい。目で見ていないならば
耳で聞きなさい。」とも言っている。

その意味は、「耳で聞いたなら、実際に目で見なさい。目で見たら、
実際にやってみなさい。まだ自分でやったことがないならば、せめ
て見ておきなさい。まだ見ていないならば、せめて聞いておきな
さい。」ということである。